



令和元年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 5 号

令和元年8月27日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

セカンドチャンス

校長 富田 敦

今年も猛暑でした。猛暑で暑い1日を「熱い1日」に変えた土呂中生がいました。音楽部です。音楽部は第60回埼玉県吹奏楽コンクール中央地区大会に参加して「交響的詩曲『走れメロス』」を演奏し、見事に銀賞を得ました。きりっとした迫力のあるいい演奏でした。銀賞の受賞校で学校名を呼ばれた時、私は思わずこぶしを握り締めるほどうれしかったです。

中村 美月 音楽部部長「コンクールでは『聴く人に音が放物線を描いて届くように、空間を響かせられるように』というコーチからの助言を心に留めて演奏しました。メロスが激怒するところや王と言い合いになるところでは、力強い音色になるよう意識しました。演奏直後は達成感があり『練習の時よりみんなが一つになれた』という実感がありました。しかし、だんだん後悔もこみ上げてきました。『この音が出なかった』『雑になったところがあった』『冷静な部分ができなかった』と。



銀賞の発表があった時は、うれしさというより安堵感がありました。3年生には悔しいと泣いている人もいました。金賞、県大会出場を目指していたからです。私は『県大会に行きたかった。悔しい』と思っています。後輩には県大会に行ってもらいたいと願っています。私はこの後も楽器を続け、今回の悔しい思いを忘れず、コンクールに出ようと思います。」

さて、東京オリンピックまであと1年を切りました。様々な競技でオリンピック代表が決まっています。夏休みに私はバドミントンのジャパンオープン準々決勝の観戦に行きました。バドミントンのオリンピック出場選手の選考は、世界バドミントン連盟によるワールドランキングから算出されたポイントによって決定します。ただし、一つの国、または一つの地域から出場できる人数は各種目2名、2組までと決められています。強豪国の一つに数えられるようになってきた日本を筆頭に、各国、各地域で熾烈な出場権獲得争いが始まっています。バドミントンの観戦は初めての経験でした。バドミントンは、ラリーが長く続きます。1ポイントを取るのが大変です。1ポイントを取るために互いに相手を揺さぶります。前後に、左右に、緩急をつけて、正確なプレースメントで相手を動かし、チャンスになったら強打でポイントを得るといった試合展開が繰り返されます。

日本人選手も含めて世界のトップを争う選手の技術はもちろん、体力、集中力は素晴らしいものがありました。中でも男子シングルス世界ランク1位の桃田賢斗選手には圧倒されました。正確無比な技術、長いラリーがあっても切らさない集中力、それを支える体力。世界ランク1位は「半端じゃない」と思いました。

桃田選手は今、セカンドチャンスを生かして戦っています。彼は、リオデジャネイロオリンピックの有力な金メダル候補であったにも関わらず、違法賭博行為により出場停止処分を受け、オリンピックの出場はならなかった過去があります。処分が明けた後、桃田選手の言動は大きく変わったと伝えられています。「競技をできることもそうですし、何不自由なく生活できるのは周りの人がいてこそ。それに気づいて感謝する気持ちが強くなりました」「もっと応援されるような選手になりたいです。そのためにはプレーだけじゃなく、人として成長しなきゃいけないと思っています」彼の処分期間中の変容が発言からうかがわれます。

セカンドチャンスの意味は全く違いますが、桃田選手の東京オリンピックでの活躍、音楽部の3年生と1・2年生の今後の活動に大きな期待をかけたいと思います。

来年のオリンピックイヤーに向けて、本校で行う「未来くる先生講演会」では、ボート競技で東京オリンピックに携わっている方に講演をしていただく予定です。